

か い き が く え ん
怪奇学園④

と し ょ し つ の ろ ほ ん
図書室の呪いの本

ウェルザード・作

せ
ぴろ瀬・絵



アルファポリスきずな文庫

もくじ 目次

だい いっ しょう 第一章

もう じゃ また
亡者が来りて…………… p6

だい に しょう 第二章

さん じゅう ねん まえ わす もの
三十年前の忘れ物…………… p56

だい さん しょう 第三章

なん じゅう ねん た
何十年経っても…………… p106

だい よん しょう 第四章

のろ めく
呪いは巡る…………… p142

登場人物紹介

桜井春風

図書室に突然現れた謎の少年。原因不明の大量死があった廃集落にいたらしく……？



菜花春香

本作の主人公。運動も勉強も苦手だが、優しい心の持ち主。春夏秋冬班のリーダーで、仲間思い。



春夏秋冬班

菜花春樹

春香のお父さん。娘を溺愛している。



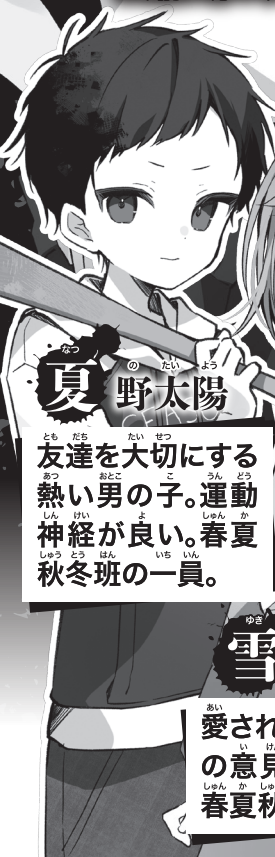
夏野海人

太陽のお父さん。見た目は怖いけど、情に厚い人。



夏野太陽

友達を大切にする熱い男の子。運動神経が良い。春夏秋冬班の一員。



秋本昂

クラス一の秀才、いつも冷静。実は運動が苦手。春夏秋冬班の一員。



雪丸冬菜

愛されキャラで、班の意見のまとめ役。春夏秋冬班の一員。



第一章 亡者が来りて

学校までやって来た私たちは、次郎兵衛のおじいさんにお供え物を持って来たことを伝えて、児童玄関で待つことにした。

おじいさんにはすぐにでも行けと言われたけど、私たちはそれでもまだ行くことは出来ない、校門のほうを見ながら横一列に並んで座っていた。

「来ないね、向日葵」

私が小さくつぶやいたけれど、みんなは返事をしない。

太陽はきつと来ると思っているのだろう。

私だってそう信じたけれど、あれほどの数の屍妖に追われていたのだ。

これだけ待っても来ないということは、万が一ということも考えられる。

きつとみんなも同じ考えなのだろう。

絶対に来ると確信しているなら今の私の言葉にも反論しているはずだし、時間が経てば

経つほどそれが揺らぎ始める。

だからこそ、来るとも来ないとも言えないんだと思う。

その空気が嫌で、何かが紛れるようなことをしないとと思い、リュックサックを下ろして家から持って来た物を確認する。

懐中電灯に防犯ブザー、あとは着替えにペットボトルの水。虫除けスプレーや絆創膏……

目まぐるしく変わる状況に、こんなのを入れていたことも忘れていたよ。

「それ、何？ おもちや？」

春風が不思議そうに尋ねたけど、防犯ブザーを知らないのかな？

「防犯ブザーだよ。これを引っ張ると、凄くうるさい音が出るんだよ」

「うるさい音？ じゃあそれを使ったら、屍妖の注意を引けるかもしれないね」

「……あのとき、私がこれをうまく使えてたら、向日葵が屍妖を引きつける必要はなかった

たかもしれないね。どうして気づかなかったんだろう」

あとになって、せっかく持つて来た物の使い道を思いつくなんて。

私って、ダメだな。

何かの役に立つと思つて準備したのに、いざというときに全然使えてないんだもん。

「過ぎたことを言つていても仕方ありません。懐中電灯や虫除けスプレーなんかは、山に入るなら必要ですからね。空が赤いとはいえ、日が落ちた山は暗いですから」

私が落ち込んでいるのを察してくれたのか、持つて来た道具を指さしてフオーしてくれる昴。

どうせなら今のうちにと、みんなで身体にスプレーを吹きかけて備えた。

太陽はまだ来ない。

「……もしかしたら、屍妖のせいで身動きが取れないのかもしれないかもですね。ここで待つより、僕たちが早く呪いを解いたほうが、向日葵くんが助かるのではないでしようか」

「屍妖がいなくなつたら、安全になるってことだね。でも、私たちだけで行けるかな」

太陽の存在はやはり大きい。

昴も冬菜も当然そう思っているのだろう。

今まで頼りすぎていたから、太陽がいなくなつたら行動出来なくなる。

だけどそれではダメなんだ。

カチカチと、懐中電灯のスイッチを入れて光が灯るのを確認した私は、ゆつくりと立ち上がつてリュックサックを背負つた。

「それなら私たちだけでも行こう。早く終わらせれば、それだけ向日葵の危険が減るってことでしょ？　こんなに待つても来ないんだから、きつとどこかに隠れてるんだよ」

怖いけど、覚悟を決めるしかない。

迷っている時間が長ければ長いほど、太陽に危険が迫るのなら。

「そうですね。僕たちは春夏秋冬班です。仲間の危機は、みんなで助け合つて乗り越えるべきです。行きましょう。禁足地に」

ビビりの私と昴が、強く決意したのを見て、春風と冬菜も頷いて立ち上がった。

私たちを助けてくれた太陽を、今度は私たちが助ける番だ。

怖い場所に何の理由もなく行くのは嫌だけど、仲間を助けるためというなら話は別だ。



怖いことに変わりはないけど、嫌だという思いはまったくなかった。

「あの幽霊が出たらどうするの？ 向日葵くんは飛び蹴りをしてたけど」

「僕がなんとかする。あの幽霊が僕たちに何をしてくるかわからないけど、屍妖なんかよりもずっと恐ろしい感じがした。だから、僕が」

決意した春風に、誰も反対はしなかった。

そして私たちは校舎を出て、裏手にある禁足地の入り口へと移動したけれど……そこで、私たちは驚く光景を見てしまった。

「え……嘘」

思わずそんな声が出てしまい、私に続いてみんなも驚きの声を上げた。

禁足地の祠の正面にある、職員室の窓の下。

そこに腰を下ろし、壁にもたれてうなだれている人の姿があったのだ。

身体中に血が付着していて、出会ったときの春風に似たような状態。

私の声に気づいたのか、ゆっくりと顔を上げてこちらを見たのは……太陽だった。

「やっと来たのか。待ちくたびれて、ちよつと眠ってたぜ。屍妖だったらアウトだったか

もな。ははっ」

あつけらかんとそう言つてのけた太陽に、私たちはどう反応して良いかわからない。「え、あ、あの……向日葵くん。本当に向日葵くんですか？　ば、僕たちも向日葵くんが来るのをずっと待っていたんですが」

戸惑いながら尋ねた昂に、太陽は顔を顰めて考え込むような仕草をして。

「藤の家に行こうとしたんだけどよ。ここから藤の家に行つたことがないから道がわからなくてさ。で、屍妖から逃げ回ってただけど、さすがに厳しくてさ。で、変なおつさんが車で屍妖を吹っ飛ばしてくれて、俺はここに來たつてわけ」

私たちを助ける前に、太陽のことも助けてくれてたんだね。

嘉右衛門のおじさんは。

それにしても、かなり危険な状況だったにもかかわらず、大したことないように話すんだから。

「よ、良かった……本当に良かった。僕がみんなを巻き込んでしまったのに、死んでしまつたらどうしようと思つて……」

「おいおい、勝手に殺すなよ。それに……お前が巻き込んだわけじゃないだろ。俺たちの意思で藤を助けるつて決めたんだ。死ぬつもりなんてないし、みんなで元の時代に帰ることしか考えてないつての」

春風に責任を感じさせないように、笑いながら立ち上がつてそう言つた太陽。

こういう事態に陥つても、決して人のせいにしない性格だからこそ、私たちはいつい頼りにしてしまふんだよね。

「向日葵くんが屍妖を引きつけてくれたおかげで、お供え物はいっぱい手に入つたよ。私と、楓くんのリュックの中に入つてる」

「お、時間を稼いだ甲斐があつたな！　いやあ、これで何もなかったと言われたら、そこら辺の草でも供えようと思つてたところだったぜ」

果たしてそれはお供え物と呼べるのだろうか。

今からとんでもなく危険な場所に入ろうというのに、バカみたいなことを言つて緊張感の欠片もない。

だけどそれが、私たちの緊張感をも和らげてくれるんだ。

「さて、ではいいよ呪いを解きに行きますよ。あの女の幽霊には気をつけてください。屍妖とは違う恐ろしさがあるようですからね」

いいよ、私たちは呪いを解くべく禁足地に足を踏み入れる。

さつきは同じ場所を歩いただけで、積み石がある場所までは辿り着けなかったから、今回やっとその場所に行くことになる。

「みなさん、行きと帰りの分、お供え物を持ってください。それにしても、積み石を壊した六年生たちは、しつかりお供えをしていたんですね。この朽ちた大根と人參がそうでしょうか。残ったリングもここに置いて行きましょうか」

知らなかったとはいえ、よく見ると答えはここにあったんだ。

最初に来たときは、ただ朽ちたお供え物があるなと思っただけで、まさかそれが禁足地を進む鍵になっていたなんてね。

「積み石をぶつ壊すようなやつらが、丁寧ににお供え物をするのな。こういう神経してるんだ？」

「……知り合いだけど僕もそう思うよ。きつと、本当は怖かったんだろうと思うけど、で

も下級生に強がりたいたから、禁足地に入れたら気が大きくなつたんじゃないかな。精一杯のフォローでも、これくらいしか言えないや」

太陽に、申し訳なさそうにつぶやいた春風。

一人ずつ、バナナとリングを祠の前に供えて行くが、この朽ちた大根と人參を見ると、もしかするとみんなで二つお供えすれば良いんじゃないかと思つたけど……せつかく持つて来てくれたのだから余計なことを言うのはやめた。

全員がお供え物を置き、禁足地に足を踏み入れた。

相変わらず身体中にまとわりつくような、ドロツとした空気に包まれる不快感。

草や木が、まるで私たちを歓迎していないかのように揺れる。

懐中電灯を道の先に向けて、それを太陽に渡すと、「俺かよ」と呆れたように笑う。嫌な感覚は、お供え物をしてでも変わらない。

集落に降りかかった呪いが、私たちを拒絶しているのだろうか。

「お、落ちていて、確実に進みましょう。はぐれたりしたら、それこそ一大事ですからね」

「あの幽霊……怖かったもんね。ひとりじゃなかった。たくさんいたから」

木々のざわめきしか聞こえない山の中でやはり怖いのか、昴は春風のシャツを掴んで、冬菜は私と手を繋いで歩いていった。

少し歩いて、あの幽霊に襲われた木の横。

もしかしたらここで待ち構えていたりするんじゃないかなと、ビクビクして冬菜の手を強く握る。

だけど……横目で見ていても、あの幽霊の姿は見えない。

ホッとひと安心したのも束の間。

ほんの少し気が緩んだ私のリュックサックのポケットから、大きな音が鳴り出したのだった。

それは、スマホの着信音。

「おいおい、誰だよこんな夜に。てか、緊張感なくなるから電源切っておけよな」

太陽に呆れられて、私は取ってもらうためにリュックサックを冬菜に向けた。

「こんな山の中で電波が届くんですね。電気が通ってなかったようですから、つぎりスマホが使えないとばかり思っていましたよ」

「いや、それはみんなの時代の話だろう？ この時代なら、今はまだ電気は使えるよ」

驚いた様子でつぶやいた昴に、春風が訂正した直後、冬菜の手が止まったのがわかった。

「……ちよっと待って。そうだよ、ここは三十年前の世界なのに……どうして着信があるの？ 高山集落は圏外じゃなかった？ そもそもまだスマホなんてない時代だね？」

冬菜の言葉に、昴の表情が明らかに変わったのがわかった。

「え、え、なにに!? ちよ、ちよっとやめてよ！ 怖い怖い！ 早く取って！ 電源切るから早く！」

「う、うん」

ゾクリと背筋に、強烈な悪寒が走った。

普段なら何も気にしないスマホの着信が、

これほど気味が悪くて恐ろしいなんて初めてのことだ。

まるで背中に得体の知れない物を背負っているかのようで、早く取ってほしい。



「は、はい、スマホ」

そして冬菜に手渡されたスマホ。

そこには……

『縫薙%縫7 豁サ縫ユ』

というよくわからない文字が並んでいて、さらに気味の悪い感覚が背中を撫でた。
早く切らなきゃ。

絶対にろくなことにならないよこんなの！

何度も何度も、拒否と書かれた赤い丸をタップするけど……画面はまったく変わらない。

「嘘、なんで……なんで切れないの!？」

もう今にも泣き出したくなるような不安と恐怖に包まれて、必死に着信を拒否しようとしているのに、スマホの画面が変わってくれない。

もうダメだと電源を切ろうとしたけど、それも反応してくれない。

みんなが見守る中で、強く拒否をタップしていたけれど……なぜか緑色の「応答」が反応し、通話画面に変わってしまったのだった。

「お、おい！」

「ち、違う、私じゃない！」

太陽にそう言って画面に視線を戻すと……何やら、ブツブツとスマホから聞こえているのがわかった。

スピーカーになつていないから、何を言っているのかわからないけど、それは絶対に聞いているといけないというのが、感覚でわかる。

こんな所で足を止めてる場合じゃないのに、これを切らないまま先に進むことは出来ない。

最近やつとスマホを買ってもらったのに、こんなおかしいことになるなんて。

そんなことを考えながら、通話を終了しようとしたときだった。

突然スピーカーがオンになり、音量が徐々に上がり始めたのだ。

[illegible]

その不気味ぶきみこえな声に驚おどろき、私は大事だいじなスマホを思おもわず地面じめんに落おとしてしまったのだ。

「あの声だ……あの幽霊の声だ！ 私に聞いた声と同じ……」

恐怖に身を竦ませる昂に、幽霊の声と同じだと判断した私がそう答えたとき。

「……お前たちは全員死ね」

「ふざげんな！」

どうにかしなければと、反射的に動いたのだろう。太陽がバットを振り上げて、怒りと共にそれをスマホに向けて振り下ろしたのだった。ゴンツという音と共に、私のスマホがくの字に曲がる。画面は砕け散り、見るも無惨な姿になったスマホを見て、安心したと同時に、絶望も感じざるを得なかった。

「わ、私のスマホ……お、お母さんに怒られちゃう」
「帰れたら俺が壊したって言うてやる！ それより……なんだ今のは！」

あまりに恐ろしい出来事に、みんなが周囲を見回す。

全員死ねと言われて、警戒しないほうがいいのはわかっているけど、私は折れたスマホを拾い上げてポケットに入れると、みんなと同じように辺りを見回した。

「あ、あ……います。向日葵くんがさつき蹴飛ばしたほう！」

昂がその方向を指さして声を上げた。

見たくないけど、確認するためにその方向に目を向けると……そこには、山の斜面を這うようにして登ってくる、あの女の幽霊がいたのだった。

草を掻き分け、十字に裂けた口を動かしながら。

それほど速くはないけれど、暗い中で懐中電灯の光に照らし出されたその化け物とも言える幽霊は、私たちに恐怖を与えるには十分だった。

「逃げるぞ！ 早く！」

立ち向かうかと思われた太陽が、誰よりも早くそう叫んで走り出した。

「で、でも、追いかけて来るよ!？」

このまま積み石がある場所まで行っても、あれに襲われてしまうのではないかと不安に

なりながらも、あまりに不気味な幽霊の姿に、逃げることしか出来なかった。

「桜ちゃん、まずは目的地に行くことが先だよ！」

冬菜は言った。

ここで太陽や春風があれと戦えたとしても、私たちはそれを見ることが出来ない。

だけど、目的地に辿り着けば、太陽たちが戦っている間も私たちは石を積みむことが出来るのだと。

嫌だけど……背後から幽霊が追いかけて来るのを感じながら逃げるのは、怖くてたまらないけど、とにかく必死で走った。

赤い空で少しは明るいはずにもかかわらず、木々のトンネルのせいで真つ暗な山道を。木々の葉っぱが擦れて鳴る、ざわざわという音が徐々に人の声のように聞こえ始める。

こっちに来い……こっちに来い……

まるで私たちを死の世界に引きずり込むような不気味な声に聞こえたんだ。

お供え物のおかげか、私たちは同じ道を走っているわけではなさそうだ。

暗くてよくわからないけど、右に左に、くねくねと曲がった道を行く。

「ひっ、ひっ……ま、まだ着かないんですか……足が疲れて……」

ただでさえ体力がないのに、舗装されていない山道で、さらに追われているという精神的な負荷が凄い状況。

昂じやなくても、そう言いたくなるのはわかる。

私だって、こんなことがなければ暗い山の中を走るなんてしなかっただろうから。

だけど、そんな私たちにも幽霊は容赦なく襲いかかる。

先に進めば進むほど、懐中電灯で照らし出す前方の木の陰に、追って来ている幽霊と同じようなモノが、音もなく現れたのが見

えた。

一度ここから出るときに、無数の幽霊がいるのを見ただけ……襲われるとなると恐ろしさがまるで違う。

ボロボロになった手を伸ばし、私たちを掴もうと迫って来る。

「くそっ！ 邪魔するなよ！ お前らがやったことだろ！ 俺たちまで巻き添えにしようとするな！」

走りながら、左手に持ったバットを振って幽霊を弾く太陽。確かに、食糧難の時代だったとはいえ、口減らしを行ったのはこの幽霊たちだ。

お供え物を二つ供えずに禁足地に入って、帰れなくなったのなら、それは私たちのせいではない。

なんて、こんなことを考えている場合じゃない！

迫り来る幽霊たちから逃げて、もうどこまで走ったかわからなくなった頃、不意に視界が広がって、赤い空が照らし出す広場に辿り着いたのだった。

一瞬、幽霊に追われていることを忘れて、その不気味な光景に目を奪われた。



草木が生い茂る山道とは違い、土の地面と、苔むした石が転がっているだけの場所だ。そしてそれが、話にあつた積み石なのだということが感覚的にわかった。

どれも子ども頭の頭の大きさで、地面に散らばっているものの、それぞれの石の塊の場所に間隔がある。

「ここが……確かに石が崩れてる。どの石がどの積み石に使われたのか、見るまで不安だつたけど、これならわかる」

爆発したとか飛び散ったわけではないというのが、見てわかるのは助かる。

だけど、その他にも問題はあつた。

「はあ……はあ……で、ですが！ この数はなんですか！ 多くても十個くらいかなと思つていましたが……三十はありそうじゃないですか！」

そう。私の目にも、崩れた石がそれくらいの塊となつて、地面の上に転がっていたのだ。これを全部積み直すというのは、あまりにも無謀ではないか。

「と言つても、やるしかないだろ！ 俺と春風で化け物はどうにかするから、三人で元に戻してくれ！」

「嘘でしょ……手分けしても一人で十個くらい直さなきゃならないの!？」

積み石を直すためにここに来たのだから、それ自体は覚悟があるからいい。

問題はその数だ。

幽霊が迫っているという恐ろしい状況で、落ち着いて作業を続けられるかどうか。

「やるしかないよ桜ちゃん。ここをお願い。私はあつちをやつて来る」

「そ、そうですね。じゃあ僕はこつちを。早く終わらせましょう」

積み石を直す作業に取りかかる昴と冬菜。

チラリと後ろの道を見てみると……

幽霊たちが私たちが目掛けて手を伸ばし、群れを成して迫つて来たのだった。

そのあまりにも不気味な姿に、小さく「ひつ」と声を出した私は、慌てて石の塊へと走つた。

こんなの、太陽と春風だけでどうにか出来る数じゃない。

かと言つて屍妖と幽霊は違うだろうし、倒すことなんて出来るのかどうかも怪しい。

「は、早く……終わらせないと」

目の前に散らばった七つの石。

一番大きな石の上に、平べったい石を置いて、うまくバランスを取りながら次の石をのせた。

けれど、どういうわけか安定している平べったい石が、拒絶するように目の前で滑り落ちて。

積み前みたいなのに、二つの石は地面の上に転がったのだ。

「え？ え？ なんて!? もしかしてこれ……」

二人はどうなのだろうと振り返ってみると、私と同じように積んでも積んでも石が自然に落ちて、思うように積めないでいた。

「ど、どうしてこんな安定している石が落ちるんですか!」

昇は意地になって何度も石を積み重ね、それらはことごとく地面に落ちる。

何がどうなっているんだと、別の石を積んでみると、やはり安定しているはずなのに地面に落ちる。

あの石は積めたのにと、もう一度平べったい石をのせてみると、それは微動だにせず。

その上に足元にある石をのせると……今度は落ちずに石の上にのったままだったのだ。

「ね、ねえ! これってもしかして……決まった順番があるんじゃないの!? 間違った順番で積むと、最初からやり直しになるのかも!」

積み石を直すというのは、本当にその順番まで元に戻すということなのだろう。

だとすると……この数を直し終わるまで、どれだけ時間がかかるのかまったく想像がでないよ。

「だとすると……形を覚えて、一つ一つのせていくしかないってことですか。とんでもないことをしてくれましたよ! これを壊した六年生は!」

昇の声に怒りが混じる。

この追いつめられた状況で、ただ積みだけではダメだというのがわかったのだ。嫌になるのもわかる。

「こいつら……屍妖と違ってどれだけ殴ってもピンピンしてるぞ!」

「な、殴れるのも訳がわからないけど! ダメだ、二人では全然抑えられない!」
太陽と春風が武器を振り回して近づけないようにしてくれているけど、やはり数が違う。



道の脇をすり抜けて、一人の幽霊が私のほうにやって来た。

「ま、待てよ！ おい！ まずい、桜！ そっち行つた！」

太陽の悲鳴にも似た声に、慌てて振り返つた私はそれを見てしまった。
ボロボロの肌、縦に割れた禍々しい目に、十字に裂けた口。

それが一直線に私に。

「ぎやああああああああつ！」

迫る姿のあまりの恐ろしさに悲鳴を上げた。

もうダメだ。

幽霊に襲われる！

そう思つて石を手につつたまま、腕で顔を覆つて尻もちをついた。

「さ、桜ちゃん！」

幽霊に殺される、こんな所で、三十年前の世界で！

お父さん、お母さん、ごめんなさい。

私、もう帰ることが出来ない！

目を閉じて、何度も何度も頭の中でその想いが繰り返される。

だけど……どれだけ経つても私は死んでいるとは思えずに、太陽たちがどうにかしてくれたのかなと、ゆっくり目を開けてみた。

が、目の前に幽霊はいた。

「ぎゃあああああつ！」

お腹の中から出たような悲鳴。

それでも幽霊は微動だにせず、ただジッと私を見つめていたのだ。

「なな、なに、なにになにつ！　なんで！　なんで！」

もう、自分でも何を言っているのかわからない。

だけど、目の前の幽霊は変わらず不気味な顔で私を覗き込んでいて、冷静でいられるはずがなかった。

「春……桜ちゃん！」

冬菜がそう叫んだけど、この幽霊はなぜか動きを止めたままで。

手を伸ばして私の肩を掴もうとするものの、それ以上のことはして来ないようだった。

何がどうなっているのかわからないけど、襲われないのなら私がやることは変わらない。本当は怖くて怖くてたまらない。

気を抜いた瞬間、大きな口でガブリ……なんてことにならないか心配だけど、肩を掴まれているもやるしかないんだ。

「……帰さない……帰さない」

呪いの言葉のように、耳元で囁かれながら、私は震える手で石を積んだ。

……落ちない。

四つ積めたから、あと三つ。

確率は三分の一だ。

失敗しても大丈夫なように、積んだ石の形を覚えて、他のよりも大きめの石を選んだ。バランスは悪い。

でも、元々積んであった物なら、積み重ねないことはないということ。うまくバランスが取れる場所を探しながら、ゆっくりと手を離す。

……うまく、当たりが引けたようだ。

違^{ちが}つていたら、のせるのに失敗^{しうばい}して崩^{くず}れるなんてものじゃない。

本^{ほん}当^{とう}に石^{いし}が拒^{きよ}絶^{ぜつ}しているように、自^{みづか}らの意^い思^しで動^{うご}いているのかと思^{おも}うほどズレて、落^{おち}下^{くだ}してしまうのだから。

「お、おい。これはどういうことだよ藤^{ふじ}。もしかしてこの幽^{ゆう}霊^{れい}……怖^{こわ}いだけで何^{なに}もしてこないのか？」

バットを幽^{ゆう}霊^{れい}に押^おしつけて進^{しん}行^{こう}を食^くい止^とめていた太^{たい}陽^{よう}が、その気^きになれば嚙^かみつくことくらい出^で来^きそうな幽^{ゆう}霊^{れい}たちを見^みてそう尋^{たず}ねた。

春^{はる}風^{かぜ}も不思議^{ふしぎ}そうに私^{わたし}と正^{せい}面^{めん}の幽^{ゆう}霊^{れい}を交^{こう}互^ごに見^みる。

「わからない。でもそれなら、僕^{ぼく}たちも石^{いし}を積^つむことが出^で来^きる。本^{ほん}当^{とう}に……こいつらが襲^{おそ}つて来^こないなら、だけど」

私^{わたし}が無^{むじ}事^じなことを確^{かく}認^{にん}して、安^{あん}心^{しん}した様^{よう}子^すの昴^{すばる}と冬^{ふゆ}菜^な。

「そ、そ、それでも幽^{ゆう}霊^{れい}に監^{かん}視^しされながらこの作^さ業^{ぎょう}を続^{つづ}けるというのは……精^{せい}神^{しん}がすり減^へりますよ！ でも早^{はや}く終^おわらせたいし……ああつ！ もう任^{まか}せますよ、お二^{ふたり}人^にに！」

昴^{すばる}でも何^{なに}がどうなっているのかわからないらしい。

最^{さい}初^{しよ}にこの幽^{ゆう}霊^{れい}に昴^{すばる}が襲^{おそ}われたとき……太^{たい}陽^{よう}に助^{たす}けてもらったときも、私^{わたし}たちを襲^{おそ}ったわけじゃなかったのかな。

いや、こんな恐^{おそ}ろしい姿^{すがた}をしているのだから、そんなはずはないだろう。

私^{わたし}たちを帰^{かえ}さないと言^いっているし、全^{ぜん}員^{いん}死^しねとも言^いったんだ。

なにか、襲^{おそ}えない理^り由^{ゆう}があるとしたら。

「あーもう！ 私^{わたし}が考^{かん}えたとつて答^{こた}えなんて出^だせるはずがない！ 今^{いま}は……次^{つぎ}の石^{いし}をのせることを考^{かん}えなきゃ」

残^{のこ}るは二^{ふた}つ。

どっちが上^{うへ}で、どっちが下^{した}なのか。

両^{りやう}方^{ほう}の石^{いし}を持^もち上^あげてみると……明^{あき}らかに、一^{ひと}つの石^{いし}から禍^{まが}々^{まが}しい気^け配^{はい}が漂^{ただ}っているのを感じた。

「藤^{ふじ}、それなら俺^{おれ}たちも石^{いし}を積^つむぞ。ヤバくなったらぶつ飛^とばす。それで行^いこうぜ」

「わかった向^{ひまわり}日^に葵^{あひ}くん。じゃあ、せーので離^{はな}れるよ。せー……のっ！」

春^{はる}風^{かぜ}の合^{あい}図^ずと共^{とも}に、武^ぶ器^きを引^ひつ込^こめた二人^{ふたり}。

止められていた幽霊たちが一斉に広場に入ってきて。

そして、昴にも冬菜にも幽霊たちが駆け寄って、その背後で立ち止まったのだった。

太陽と春風にも、顔を覗き込む幽霊がいる。

多く見えたけど、幽霊の数は八人。

もつといるように見えたのに、怖いと思つていたからたくさんいるように見えたのか。

「ひ、ひえええええつ！ こ、こんなの集中出来るわけがないですよ！」

「で、でも……頑張つてやるしかないよ。頑張ろう、楓くん」

「ビ、ビオラさん……」

そんな声が後ろのほうから聞こえたけど、私はと言うと幽霊が二人ついてしまった。

この禍々しい気配の石を先に積みめということなのか、それとも別の意味があるのか。

そういえば八十兵衛のおじさんが言っていた。

殺すために使った石を、一番上に置くつて。

だとしたら……この石が一番上かもしれない。

殺されたほうからすれば、自分を殺した石だ。

それにおかしな念が込められていても不思議じゃない。

「……帰さない……帰さない」

幽霊二人に囁かれて、いつ襲われるかわからないという恐怖の中で、私は震える手で石

を積んだ。

バランスを崩して落ちそうになったけど、拒絶されている雰囲気はない。

慎重にのせられる場所を探して、ゆつくりと手を離すと……うまく積めた。

最後にこの石をのせれば、一つ目が完成だ。

そんな私の顔を、幽霊が覗き込んで邪魔をして来る。

「ひやつ！ じゃ、邪魔しないでよ！ 怖い顔を向けないで！」

怖いという想いもあったけれど、それよりも今は邪魔されたことに腹が立つてしまった。

確かにこれは集中出来ない。

私たちを邪魔しようとしているなら、大成功しているからこれ以上の邪魔はしないです

しいよ。

変な汗が身体中から噴き出している。

幽霊に襲われないなんて、私たちはもうとつくに死んでいるのではないか、幽霊になつてしまったのではないかと錯覚してしまう。

残る石を、うまくのせられるように石の形を確認して、出来るだけ平らになっている部分を下にして石の塔の上にのせた。

「……ん。積めた……積めたよみんな！」

「お、おお？ やつたな桜！ 俺も負けてられねえ！」

喜ぶ私にそう言つて、太陽が屈んだのは三つの石の前。

私は七段積んだのに、三段を選ぶところが、細かい作業が苦手な太陽らしい。

続いて、五段の冬菜、そして四段の昴と、次々と完成させていった。

この調子で行けば、思ったよりも早く終わりそうだという、微かな期待が芽生え始めていた。

だけど、それは思つてもみない形で打ち碎かれることになつたのだ。

必死に石を積んでいる最中、山道のほうから不規則な足音が聞こえた。

八十兵衛のおじいさんか次郎兵衛のおじいさんでも来たのかなと、幽霊の横から見ても

ると……

そこには、私たちと同じくらいの年齢であろう屍妖が、ニタニタと笑いながら立っていたのだ。

「あははは！ いたいた！ ここ二入ルのが見エたから来てみたら……やつぱりいた！」

五人の子どもの屍妖。

こちらにも五人いるけれど、太陽と春風くらいしか屍妖と戦える人がいない。

石を積むのは大変なのに、屍妖までいたらまともに積めるはずがない！

「う、嘘でしょ……こんなときに屍妖だなんて！ 勘弁してくださいよ！」

「俺と藤がなんとかする！ みんなは統けてくれ！」

パニックになる昴を落ち着かせるように、バットを手に立ち上がった太陽。

春風に目配せすると、二人で山道のほうを向いて、武器を構えた。

「禁足地なんぢ怖くないぜ！ なんだこの石ハ。壊せ壊せ！」

今まで出会った屍妖と違う。

私たちを一瞥すると積み石のほうを見て、突然走り出して私がせつかく積んだ石を蹴飛

ばして崩くずしてしまったのだ。

「な、なんで！ やめてよ！ 積つむの大変たいへんなんだから！」

あまりにも予想外よそうがいの行動こうどうに、誰もそれを止とめることが出来できなかった。

「くそっ！ なんなんだよこの屍妖しやう！ 大人おとなと違ちがってすばしっこくて当たあたらねえ！」

積み石いしを崩くずされるのを防ふせごうと、太陽たいようがバットを振り回まわすけど、子こどもの屍妖しやうはそれを避よけて昴すばると冬菜ふゆなが積つんだ石いしを壊こわしてニタリと笑わらった。

そして、作業中さぎょうちゆうの私わたしたちに向むかって不気味ふきみな笑えみを浮うかべたまま、ゆつくりと迫せまって来たきたのだ。

「俺おれたちハ六年生ろくにんせいだから、何も怖ころねエ。禁足地きんそくちなんぢ怖こくないもんね」

もしかしてこの屍妖しやうは……春風はるかぜが言いっていたマサシ？

だとすると、集落しゅうらくをこんなにした張本人ちやうほんにんなのに、呪のろいを解とこうとする私わたしたちの邪魔じゃままでするつもりなの！？

生きていない人間にんげんだからか、幽霊ゆうれいたちは屍妖しやうを見ていない。

私わたしたちは……幽霊ゆうれいと屍妖しやうに邪魔じゃまされる中で石いしを積つまなければならぬのだ。

そんなの無理むりに決きまつてるよ！

私わたしが諦あきらめそうになったとき、春風はるかぜが強つよい口調くちやうで声こゑを上げた。

「やめるマサシくん！ 屍妖しやうになってまで、迷惑めいわくをかけるなよ！ あんたたちのせいだろ！ 集落しゅうらくがこうなったのは！」

その瞬間しゆんかん、私わたしたちの背後はいごにつきまとっていた幽霊ゆうれいたちが一斉いっせいに顔かおを上げて、マサシと呼ばれた屍妖しやうに飛とびかかったのだ。



目を大きく見開き、十字の口を開けて囁みつく。

バリバリと肉を食い千切り始め、屍妖のマサシがどんどん小さくなって行く。

「なんダよこし！ 食われル……食わしる！ 俺はたダ、強いところを見せた力つたダけ
なノに……ぐひゃっ！」

その勢いは尋常ではない。

まるで、飢えを満たそうとするかのように、我先にとマサシを食い尽くして、骨すらも
残らなかつたのだ。

私たちの背後で、あの幽霊たちは食べようと構えていたのだろうか。

だとすると……マサシと私たちの違いはなんなのだろうか。

「なんで……もしかして屍妖だから食われたのか？」

「い、いえ。違いますよ向日葵くん。この屍妖たちは幽霊に見向きもされていませんでし
た。でも、藤くんが怒鳴った直後に変わったような気がします！」

「てことは……つまり、怒ればいいんだな!? おいコラてめえら！ ふざけんなよ！
ぶつ飛ばすぞバカ野郎！」

バットを地面に叩きつけて、まるで駄々をこねる子どもみたいな怒り方をした太陽。

当然と言うべきか、そんなことをしても幽霊たちは他の屍妖を襲おうとはしなかった。

「全然動かねえよ！ 怒ればいいんじゃないのか!？」

「ぼ、僕に言われてもわかりませんよ！ でも……だとすると一体何が……」

太陽に怒られて、昇が慌てて考える。

目の前に屍妖が迫っているというのに、何も出来ずに石を崩されるのかと絶望していた
ときだった。

冬菜が、思い出したように顔を上げた。

「名前……山に入ったら名前を呼んじやダメなんだよね!? 私たちは偽名を使ってるけど、
藤くんが『マサシくん』って呼んだから！」

「そうか……それなら！ ヒサシくん、カズヨちゃん、タツヤくん！ ええと……あと
一人」

名前を呼ばれた屍妖が、次々と幽霊に襲われ始める。

マサシと同じように、肉を食い千切られ、奪われるように手足を千切られ、見るも無惨

な光景が目の前で繰り広げられたのだった。

あまりに凄惨な光景に、気持ち悪くなって吐きそうになる。

口に手を当てて目を背けながらも、名前を呼ばない理由に納得した。

あのとき、春風が呼び名を決めようと言ってくれなかったら、私たちもこうなっていただろうな。

何度か怪しい場面はあったけど、それでもみんな徹底して偽名を呼んでいたから助かったよ。

「みんなが食べられてる。だつたう、仲間を増やせば良いよね」

名前を呼ばれなかった屍妖が、一番近くにいた私に顔を向けて、満面の笑みを浮かべて駆け出した。

「あ、危ない！ 桜っ！」

それを見て太陽が駆け出す。

私を掴もうと手を伸ばし、口を開けて迫る。

助けてくれる人はいない。

そう思った私は……足元のバットを握り締め、その口を目がけて突いた。

勢いよく駆け寄った屍妖の口の中にバットが押し込まれ、手に強い衝撃が伝わる。

「あがつ！」

バットが口に入った屍妖が、急に動きを止められて悲鳴を上げる。

とても痛そうで、もしも自分がこうなったらと考えたら本当に吐いてしまいそうになる。

「邪魔……しないでよっ！」

いつまでもお荷物ではられない……なんて殊勝な想いがあつたわけではない。

でも、これはチャンスだと思ったから、少しでも役に立てるなら、思い切りバットを押し込んだ。

その勢いに負けて、屍妖が後方に倒れる。

と同時に、駆け寄った太陽がバットで屍妖を横から殴りつけて、幽霊のほうに吹っ飛ばした。

「そうだ、ユウコちゃん！ いつもあだ名で呼ばれてたから名前が出てこなかった」

春風がそう叫んだ次の瞬間、吹っ飛んだ屍妖を迎えるように幽霊の顔の向きが変わり、

大口を開けて屍妖に食らいついたのだ。

それはひと口で頭部の半分を消失。

他の屍妖を食べ終わった幽霊が、ゆらりと立ち上がり、そして新たな獲物へと移動してまた食べ始めた。

「うええ……幽霊が屍妖を食べてますよ……ば、僕はまたチビってしまいそうです」

「で、でも……これで石を元に戻せるよ。またやり直しただけ」

これを終わらせなければ呪いは解けない。

それがわかっている冬菜は、誰よりも早く石積みの上に取っかかりかけた。

「あ、ありがとうね向日葵。私を助けてくれて」

「ああ？ いつものことだろ。困っていたら助け合うのが、春夏秋冬だから」
胸を張ってそう言った太陽は、やっぱり頼もしい。

あのとき私がバットを突きつけてなかったらどうなっていただろう。

きつとあの屍妖の言葉通り、屍妖の仲間になつていたに違いない。

そう考えると恐ろしくてたまらないよ。

「さて……壊された積み石は、僕と向日葵くんが直すから。みんなは残りをやって。こっちが終わったら合流するから」

「お前、切り替え早いよな。屍妖とはいえ、同じ学校の六年生だろ？　なんかこう……悲しさとかないのかな？」

指示を出す春風に、太陽が呆れたように尋ねたが、春風は首を横に振った。

「マサシくんたちのせいで、集落のみんなは死んだんだよ。僕は大人じゃないし、聖人でもないんだ。それに、呪いを解こうとしてる友達らの邪魔をしたんだから、許せるはずがない。許してしまったら……僕は、集落のみんなを殺された恨みをどこに向ければいいかな



わからなくなる」

優しい春風は、私たちにも打ち明けられなかった想いがあつたのだろう。

だけどそれがとても人間らしいし、落ち着いていても私たちと同じ子どもなんだと改めて思うことが出来た。

それから何時間経つただろう。

私たちは変わらず背後に幽霊につかれたまま、緊張の中で石を積み続けた。

大事なことは、絶対に本名を呼ばないということ。

背後の幽霊の口からはずっと「帰さない……」と声が聞こえ、集中力を乱されて何度も石を崩してしまう。

その度、嫌になって誰かに八つ当たりしそうになるけど、振り返ると幽霊の不気味な顔があつて気持ちがしぼんでしまった。

「いよいよですね。桜さん、あと二つです！ もう終わらせましょう！」

最後の石積み。

残る石は二つ。

だけど、不思議なことにずっと感じる事が出来た、一番上の石の禍々しい気配を感じない。

最後だから自分の勘でやれってこと？

あの気味の悪い気配を感じたから、どれが一番上かわかったのに。

「これで呪いが解けるのかな。お願いだ……みんながいなくても、元の集落に戻つてくれ……」

祈るようにつぶやいた春風の想いに応えたい。

どちらの石が先なのか、悩んだ私は左手の石を四段積んだ石の上にのせた。

崩れるか、崩れないか……

みんなが見守る中……石は崩れずに、その姿を保っていた。

「ふう……これで最後だね。これで全部元通り」



最後も慎重に、石を確認して少しでものせやすい場所を探して、私は一番上の石を置いた。すると、不思議なことに赤い空が徐々に色が薄れ、青くなり始めたのだ。時間の感覚がわからないけど、もしかして呪いが解けて朝が来たのかな。

幽霊たちは私たちから離れ、山の中へと消えて行く。

ああ、呪いが解けたんだと安堵して、私はその場に座り込んだ。

土で服が汚れることなくって気にもせず、張りつめていた緊張が一気に抜けたように。

「やった……呪いが解けた。ありがとうみんな、本当にありがとう……」

よほど安心したのだろう。

突然ボロボロと涙を流して泣き始めた春風。

屍妖に襲われて、私たちの時代にやって来て、そしてまた元の時代に戻って呪いを解く

なんてことをしたのだ。

その安心感は私たちにはわからないものだろう。

「やりましたね。とりあえず禁足地から出しましょう。いつまでも、禁じられた場所にいた

くはないですからね」

「まったく。でもよ、これからどうするんだ？ 藤の家族もみんないないんだろ？」

昴と太陽に促されて、私たちは禁足地から出ることにした。

朝が来たと言ってもまだ暗くて、ここは怖いから。

まあ、屍妖と幽霊に襲われたよりも怖いことなんてないんだけどね。

「僕は……町にいる親戚の家に行くよ。まだ子どもだから、僕一人では何も出来ないから」

歩きながらそう言った春風は、やつぱり少し寂しそうだつた。

山を下り、祠まで戻って来た私たちは、お供えしたバナナとリングが途端に朽ちてしま

うのを見てしまった。

何がどうなつてこんなことが起こるのかはわからなかったけど、このお供え物のおかげ

で、私たちは無事に帰ることが出来たのだらうと思うしかない。

「戻って来たね。これで本当に呪いが解けたのかな」

冬菜が少し不安そうに言ったけど、原因となったはずの積み石は元に戻したし、これい

上は私たちに出来ることはない。

「きつと……ね。でも本当にありがとう。みんながいなかったら、僕はずっと何も出来ず